

東南アジアにおける生薬の比較研究

(第Ⅶ報)[†]

——動物を基原とする中薬について(1)——

新 田 あ や*・小 島 一 郎**

A Comparative Study of Crude Drugs in Southeast Asia, Part Ⅶ

——Chinese Crude Drugs Originated in Animals (1)——

by

Aya NITTA and Ichiro KOJIMA

は じ め に

前報まで5報にわたってシンガポールの中薬について述べたが、本報では第Ⅲ報で触れたように、動物類生薬に関して、東南アジアにおける他の市場品も合わせて、それらの基原などを詳しく検討した結果について報告する。

動物類生薬に関する報告はこれまでにあまり多くない。それは生薬全体の中では、やはり植物性生薬が大部分を占め、動物性および鉱物性のものが少ないこともその理由のひとつである。動物類生薬に関する報告のうちで、まとまったものとしては葯材学や中薬志第Ⅳ巻があるが、これらは1950年代の中国における実際の市場品を収集して、詳細に調べあげられた結果の報告書と見なすことができる。葯材学においては全生薬673品目中、動物類は82品目で、約12%強である。また中薬志の第Ⅰ巻から第Ⅳ巻までの全生薬494品目中、動物類は70品目で、約14%となっている。一方 *Gardens' Bulletin* 第6巻のマラヤの中薬430品目中の動物類は18品目、約4%で、非常に少ない上に、葯材学や中薬志のように基原が記載されておらず、単に慣用名が記載されているにすぎない。

さて、本報と次報では1971年春の生薬調査に際して収集した3市場すなわちシンガポール

* 京都大学薬学部生薬学教室

** 住友化学工業株式会社宝塚研究所

[†] 「東南アジアにおける生薬の比較研究(第Ⅴ報)」『東南アジア研究』(1973) Vol. 11 No. 2, pp. 256-266

（581品目中46品目，約8%），マレーシア，クチン[†]（425品目中36品目，約8%），およびクアラランブール[†]（725品目中74品目，約12%）の中薬のうちの動物類と，これに加えて1971年3月，ジャカルタにおいて Gunarso 氏が収集した中薬 381 品目のうちの動物類25品目（約7%弱），をあわせ，これら4市場間の異同と，それらの基原についてできるだけ詳細に検討することを目的とした。

動物類と一口にいても，動物体の全形を留めているものや，ある一部分だけしかないもの，あるいは分泌物や排泄物もあれば，人為的に抽出したものまで，その形態はさまざまである。植物性生薬では便宜上，茎・材類，皮類……というように形態によって分類し，最後に隠花植物や加工品などをまとめてその他として報告してきたので，動物類もおおまかに分類して報告する。従来動物類は量的にも少ないので形態による類別はされことなく単に分類学的に下等から高等へと配列されてきたが，著者らは次のように大別する。これは基原は違っているが形態上類似性のあるものを観察する上で大変便利である。

I 卵および巢など

II 糞類

III 分泌物および抽出物など

IV 動物体の全部あるいは一部

東南アジアの4市場の動物類は全部で189品目あったので，まずI，II，IIIおよびIVのうちの節足動物をあわせて1報とし，残ったものすなわち節足動物以外の動物体を次報とする。

記載する項目は代表生薬名，使用部，市場品，基原，考察および異名である。代表生薬名は薬材学の見出し生薬名をとり，薬材学にないものは中薬志から，そしてどちらにも記載のないものは市場品名をそのまま使った。考察では主として基原を決定あるいは推定した根拠をあげ，特に科あるいは属レベルよりこまかい鑑別ができない理由および基原として可能性のある動物をあげておいた。異名は薬材学，中薬志，実用中薬手冊，和漢薬名彙，古今薬物別名考などの順で，できるかぎり多く拾いあげた。それは中薬のうちで動物類の比率は小さいとはいえ，最古の中薬書である『神農本草経』（後漢時代，22—250）365品目のうち67品目もあり，その後の本草書においてますます増加し，同義異名あるいは同音異字，あるいはまた同名異物などの問題があるので，参考になればと思ったからである。

I 卵および巢など

この中には6種類，4市場で16品目を含む。

桑螵蛸*（かまきり類の卵）（写真1）

市場品：S 490，K 370 桑螵蛸，Dj 321 双螵蛸，KL 612 桑蛸

[†] 未整理のため，数字は多少変化する。

* 薬材学記載（以下のページも同様）

基原：S 490 および KL 612 はそれぞれ2種類混合しており，そのうち1種類は同じものである。しかもそれは K 370 および Dj 321 とも共通である。

A *Tenodera aridifolia* f. *sinensis* Sauss. オオカマキリ (Mantidae, カマキリ科)，本州以南，中国，朝鮮

——S 490-a, K 370, Dj 321, KL 61-a——

卵鞘は短円柱状で，一端はやや細くのびている。かっ色で，外面は軟かい。

B *Statilia maculata* Thunb.* コカマキリ

(Mantidae)，本州以南，中国に広く分布。

——S 490-b

卵鞘は細長く，下端はやや尖っている。

C *Hierodula patellifera* Serv.* ハラビロカマ

キリ (Mantidae)，東亜熱帯

——KL 612-b

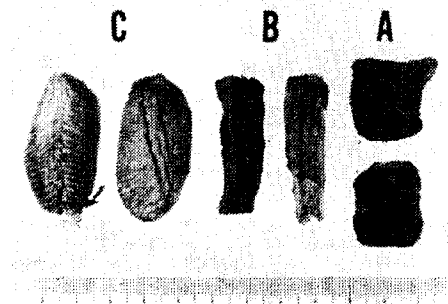


写真 1

卵鞘はAより少し長く，中央部がふくらんだ円柱状で，色は黄かっ色，外面はやや硬い。

考察：葯材学にはさらに別種があげられているので，かまきり類の卵鞘であれば属および種を問わないと考えられる。

異名：螳螂窠，螳螂子，刀螂蛋，螳螂蛋，刀螂子，螳螂蛋，流尿狗，螳螂虫，老鴿苳臍，老鴿臍，双少，致神，蟲教，蜉蝣，螳螂，轉螳，桑漂螳，螳螂蟲，螳螂桑，螳螂巢，螳螂窩，遺尿窠，野狐鼻涕，螳娘子，不過，齏肱，蜉蝣，螳螂子房。螳螂虫

蚕茧† (かいこのまゆ)

市場品：S 619 白蚕衣，KL 655 羌蟲衣

基原：*Bombyx mori* L. カイコガ (Bombycidae, カイコガ科)

考察：まゆだけでは他の基原例えばクワゴ *B. mandarina* (カイコの野生種) やサクサン (柞蚕) *Antheraea pernyi*, シンジュサंगा (柞蚕蛾) *Philosamia cynthia pryeri*, エリサン *P. cynthia ricini* (Saturniidae, ヤママユガ科) などと区別することは困難であるが，供給面から考察すれば，まずカイコのまゆであろうと思われる。

異名：蠶殼，白蠶皮，蚕衣，蠶壳，馬明

露蜂房* (あしながばち類の巢)

市場品：S 615, K 374, KL 618 蜂房

基原：*Polistes* sp. (Vespidae, スズメバチ科)

考察：巣だけでは種を決定することができないが，3市場品はいずれも同種のものと思われる

† 中葯志

る。なお HK 194 蜂巢（ホンコン市場品，中国南部産）も同じものである。

異名：蜂窩，蜂子窩，馬蜂窩，野蜂窩，馬蜂房，百穿之巢，百穿，金房，密房，蜂家，蜂勦，蜂腸，牛蜂家，蜂鳳巢，虎頭蜂，鷄籠蜂，石蜂巢，牛蜂窠，革蜂窠，草蜂窠，独蜂窠，紫金砂，樓臺，黃薑蜂窠，紫金砂

燕窩*（あなつばめの属の唾液のみでつくられた巢）

市場品：KL 635 咽喫燕，KL 636 血燕

基原：Collocaria sp. (Apodidae アマツバメ科)

考察：巣だけで種を決定することは不可能である。KL 635 は白色，KL 636 は橙赤色で，白色のほうが品質がよいとされているが，同種かどうかわからない。葯材学には 4 種があげられている。すなわち *C. thunbergi*, *C. inexpectata* Hume, *C. unicolor* Jordon および *C. linchi affinis* Bearan. である。動物分類学辞典によれば，中華料理用の代表種は，インドネシア産の *C. francica* およびフィリピン産の *C. selangana* であるという。シンガポールでは調査した薬店にはみられなかったが，食糧品店にはいろいろな等級の燕窩があった。

異名：燕蔬菜，燕菜，燕根

雞蛋壳*（にわたりの卵殻）

市場品：S 526 鶏旦壳，K 387, Dj 387 雞旦壳，KL 638 鸡蛋壳

基原：Galls domesticus Brisson* ニワトリ (Phasianidae, キジ科)

異名：鶏卵壳，蛋壳，卵硬壳，雞子，黄菜，鳳凰衣，鳳凰退

鳳凰衣*（鶏卵内の薄膜）

市場品：Dj 342 鳳凰衣

基原：雞蛋壳に同じ。

考察：本生薬は薄膜を主とするが，硬い卵殻も多少伴っている。異名からもわかるように，雞蛋壳と混同されている。

類似生薬としてアヒル *Anas platyrhynchos domestica* L. およびガチョウ *Anser domesticus* L. (Anatidae, ガンカモ科) の卵殻あるいはその薄膜が考えられる。

異名：雞蛋膜，鳳凰退，抱過雞子壳

Ⅱ 糞 類

このグループには 8 種類，4 市場で 22 品目が含まれる。糞だけで種を決定することは非常に困難である。

油虫珠（ごきぶり類の糞）

市場品：S 521 遊虫珠，K 369 油蟲珠，Dj 341 虫珠，KL 659 油虫珠

基原：Blattaria ゴキブリ亜目

考察：4市場品はすべて同じものと思われるが、糞だけから同定は不可能である。しかし本邦で普通にみられるゴキブリ（和名ヤマトゴキブリ，*Periplaneta japonica* Karny, Blattidae ゴキブリ科）の糞は黒く、本生薬より小さいので、基原はこの種ではない。シンガポールの薬店で何の糞かと尋ねたところ、ひきだしから生きたゴキブリを追い出し、捕えてくれた。そのゴキブリの糞は確かに本生薬に似ており、しかもそれはチャバネゴキブリ *Blattella germanica*, (Blattellidae チュバネゴキブリ科) と思われる。しかしながら糞の説明にゴキブリ類の糞であるという意味だと思ったほうがよいと思われる。HK 201 甲由糞ホンコン市場品、台湾産も本生薬と全く同じものである。

異名：油蟲沙，油虫沙，黄徹糞

蚕砂*（かいこの糞）

市場品：S 493, KL 617 晚蚕砂，K 373 羌蠶砂

基原：*Bombyx mori* L.* カイコガの幼虫 (Bombycidae)

考察：糞の形態だけではヤママユガ科 Attacidae のものと区別することはできないが、供給面から考えれば、まずかいこの糞と考えてよい。

異名：晚蚕砂，原蚕砂，蚕屎，蚕糞，蚕沙，二蚕沙，晚蚕矢，原蚕沙，沙，吞，蠶砂，二蠶砂，原蠶砂，晚蠶沙，夏蠶粉，晚蠶砂，晚蚕沙

白丁香*（すずめ類の糞）

市場品：S 504 白丁香

基原：*Passer* sp. (Ploceidae, ハタオリドリ科)

考察：薬材学では基原として *Carduelis spinus* マヒワ (Fringilidae アトリ科) および *Passer montanus saturatus* Stejneger スズメをあげているが、分布からニューナイスズメ *P. rutilaus* Temminck も考えられる。中薬志では *Passer* 属 1 種をあげ、*Carduelis* 属は記載していない。本生薬は最も分布地域の広いスズメの糞と思われるが、時期的に大量に得られるニューナイスズメのものかもしれない。

異名：雀尿，麻雀糞，雄雀屎，雀酥，麻雀屎，青丹，雀蘇，老冰片，雄雀矢

白鴿屎（はと類の糞）

市場品：KL 664 白鴿屎

基原：*Columba livia* L. var. *domestica* L. カイバト (Columbidae, ハト科)

考察：ハト科には *Columba* 属のほかに *Streptopelia* キジバト属が分布から考えて可能であるが、供給面から考えるとカイバトと考えるのが妥当であろう。母種はカワラバトで、ヨーロッパとアジア南部、インドから中国南部にかけて広く分布し、岩山に営巣する。

五灵脂*（おおこうもり類の糞）

市場品：S 510 五脂灵，K 389, Dj 331, KL 641 五灵脂

基原：Pteropus sp. (Pteropodidae*→Pteropidae, オオコウモリ科)

考察：葯材学では P. pselaphon Lay 寒号虫, P. dasymallus Temminck 苑蝠ほか近縁動物の糞と記載しているので、形状がほぼ同じであればよいと思われる。

異名：灵脂，寒号鳥糞，蝙蝠糞，草灵脂，五灵子，寒雀糞，寒号虫屎，懶老婆屎，丹芝，白芝，龍芝，藥本，靈芝，靈之，靈脂，生常山，生泰山，生霍山，五靈芝，會散灵，糖五灵，靈脂散，靈脂糖，獨春屎，鵲鵲屎，寒號虫，侃旦

夜明砂*（こうもり類の糞）

市場品：S 511, K 390, Dj 332, KL 642 夜明砂

基原：Vespertilionidae ヒナコウモリ科または Rhinolophidae キクガシラコウモリ科

考察：葯材学には Vespertilio murinus L. キタヒナコウモリおよび Rhinolophus ferrum-equinum Temminck の2種のみが記載されているが、分布から次の種も生薬とされる可能性がある。Pipistrellus oframum Temminck イエコウモリ，Myotis formosus Hodgson クロアカコウモリ，および M. nattereni ノレンコウモリ (Vespertilionidae)，しかし葯材学に記載された2種はアジア，ヨーロッパに広く分布する。またキクガシラコウモリはオーストラリアにも棲息する。

異名：蝙蝠糞，蝙蝠屎，天鼠屎，鹽老鼠屎，石肝，鼠法，鼠糞，千里光，天鼠屋，天鼠糞，黒砂星，爛砂星，爛紫精，兔糞，仙屎，伏翼屎，飛鼠屎，夜燕屎

望月砂*（うさぎ類の糞）

市場品：S 512, K 391, Dj 333, KL 643 望月砂

基原：Oryctolagus cuniculus L. var, domesticus Gmelin カイウサギ (Leporidae ウサギ科)

考察：葯材学では Lepus cuniculus L. (=Oryctolagus cuniculus L. カイウサギの原種) および L. europaeus aurigineus Hollister そのほか野兎類の糞と記載している。供給面から考えてカイウサギをあてておく。ただし K 391 は糞にやや稜があるので，別種かもしれない。

異名：野兎子糞，山兎屎，山兎子糞，兎矢，兎糞，月砂，明砂，兎糞，明月砂，望月，翫月砂，兎仔糞

宗公祠（小型哺乳動物の糞？）（写真2）

市場品：Dj 345 宗公祠

基原：不明

考察：径 2~4 mm，長さ 4~6 mm の俵状で夜明砂に似ているが，黒かっ色の塊である。表面にこまかい黄かっ色のせんいが多数付着している。

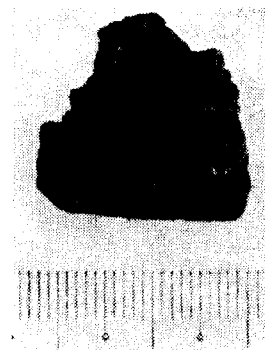


写真 2

→動物分類辞典による科名（以下のページも同様）

Ⅲ 分泌物および抽出物など

この中にはラック、龍涎香、凝固血液類、にかわ類など11種類、4市場で17品目が含まれる。血液類やにかわ類については生薬名からその基原を記載したが、贋偽あるいは類縁生薬かどうかを検討する方法が見当たらなかったためである。

紫草茸*（ラックカイガラムシの雌の分泌物）

市場品：KL 615 洋紫梗

基原：Laccifera lacca Kerr.* ラックチュウ、ラックカイガラムシの雌（Lacciferidae, ラックカイガラムシ科）

考察：和漢薬名彙によればラックカイガラムシは次の植物に寄生する。

1. Aleurites spp. アブラギリ属（Euphorbiaceae, トウダイグサ科）
2. Croton spp. ハズ属（Euphorbiaceae）
3. Ficus spp. イチジク属（Moraceae, クワ科）
4. Zizyphus spp. ナツメ属（Rhamnaceae, クロウメモドキ科）
5. Butea spp. (Leguminosae, マメ科)

異名：紫膠、紫虫膠、赤膠、花没药、洋干漆、紫梗、紫釐、虫膠

虫白蜡*（いばたろうかいがらの雄の分泌物）

市場品：KL 686 川白蜡

基原：Ericerusa pela Chavannes* イボタロウムシ、イボタロウカイガラ（Coccidae カタカイガラムシ科）

考察：薬材学によれば寄生植物は Oleaceae モクセイ科の3種である。

1. Ligustrum ibota Sieb. var. angustifolium Bl. (=L. obtusifolium Sieb. et Zucc.) イボタノキ、水蜡树
2. L. lucidum Aiton トウネズミモチ、女貞
3. Fraxinus chinensis Roxb. 白蜡树

本生薬は類白色で光沢のある不定の塊で、断面は明らかな結晶模様を呈する。

異名：白蜡、川蜡、虫蜡、蟲白蠟

龍涎香*（まっこうくじらの腸結石）

市場品：KL 649 龍涎香

基原：Physeter macrocephalus L.* (=P. catodon L.) マッコウクジラ（Physeteridae, マッコウクジラ科）

異名：龍涎、龍泄、龍腹香、龍泄、龍涎香、鯨糞、正龍涎、龍腹香

人中白*（便槽中に尿により沈着した堆積物）

市場品：K 401, KL 652 人中白

基原：Homo sapiens L. ヒト (Hominidae ヒト科)

考察：固形物の主成分は炭酸カルシウムであるが，尿中のホルモンなどの含有を期待した薬物である。

異名：溺白涎，淡秋石[†]，千年冰，中白，人尿白，千年氷，小便滓，尿白鹹，秋白霜，白涎，白尿白，萬年霜，尿白鹼

鶏血纂膏（にわたりの凝固血液）

市場品：KL 680 鶏血纂膏

基原：Gallus domesticus Brisson ニワトリ (Phasianidae, キジ科)

考察：厚さ約 2 cm に平らにのばしたものの碎片である。黒色で光沢があり，ところどころに微細孔があり，ややなまぐさい臭気がある。血液を煮つめたものであろうか。

山羊血（大型動物の凝固血液）（写真 3）

市場品：K 400, KL 668 山羊血

基原：Bovidae ウシ科

考察：和漢薬名彙によれば，山羊はニホンカモシカ *Capricornis (Capricornulus) crispus Temminck* またはタイワンカモシカ *C. swinhoi Gray* で，その血液凝固物を山羊血というが，贗偽生薬として水牛血，牛血，馬血などがあるという。著者らは基原は家畜ではないかと考えている。名称からはヤギと思われるが，実際の生薬は水牛血である可能性が高い。

本生薬は 2 市場で形態が異なる。KL 668 は径約 2.5 cm，長さ 3 cm で短いウインナソーセージ様（写真 3-A），表面は茶かっ色で粗い網目模様が見える。一方 K 400 は不定形で黒色，光沢のない塊で破砕しやすい（写真 3-B）。

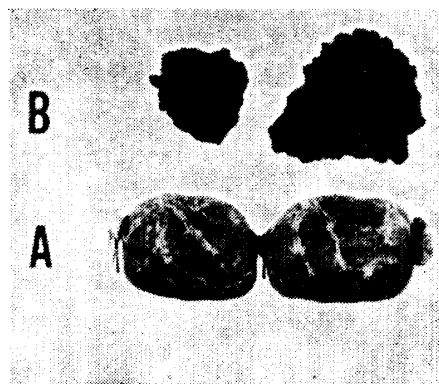


写真 3

異名：青山羊血

黒兒血（大型動物？の凝固血液）

[†] これはよく似た名称の*秋石*は天然食塩

市場品 : KL 638 黒兒血

基原 : 不明

考察 : 黒色塊, 表面は光沢があり, 内部は多孔質, なまぐさい, 猪血あるいは豚血?

亀板膠* (亀板から得たにかわ)

市場品 : KL 676 亀板膠

基原 : *Geoclemys reveesii* Gray* クサガメ (Testudinidae カメ科), インド北部から中国, 台湾, 朝鮮, 日本に分布

考察 : 臭気を出すかめである。本生薬は不定形の塊で一面は厚さ約 1 mm の黄かっ色多孔質被膜におおわれている。破折面は黒色 (薄い時は半透明でかっ色), やや光沢がある。

虎骨膠* (虎骨から得たにかわ)

市場品 : KL 679 虎骨膠

基原 : *Felis tigris slyani* Pocock* (→*Panthera tigris*) トラおよび同属他種動物 (Felidae, ネコ科), アジア

考察 : 本生薬は不定形の塊で, ややかっ色を帯びた黒色, 光沢はあまりない。基原動物としてヒョウ *Panthers pardus* (アジア) やネコ *Felis catus* (= *F. domestica*) の可能性もある。

鹿角膠* (しか類の角から得たにかわ)

市場品 : KL 677, KL 678 鹿角膠

基原 : *Cervus nippon nippon* Temminck* (→*C. nippon* Temminck) シカ, または *C. taiouanus* Blyth カロク, または *C. elaphus* L.* アカシカ (Cervidae シカ科)

考察 : 両者は品質が異なる。KL 677 は定形で, $2 \times 2 \times 0.5 \text{ cm}^3$, 一端は 0.3 cm 幅の黄色帯となり, 全体は黒かっ色で, あまり光沢がない (阿膠にもこれと同形のものがあるが, こちらはより光沢がある)。KL 678 は不定形の塊で, 黒かっ色で光沢がある。鹿角膠は鹿角から製することになっているが, 実際には皮膚屑なども使われるのではないと思われる。次に述べる阿膠はウマ科動物の皮膚屑から作られたにかわであるが, これは黒かっ色で光沢がある。このことから考えてみると KL 677 は鹿角から, KL 678 は鹿角および皮膚屑を混入されて作られたので, より光沢をもつのではないと思われる。定形の KL 677 のほうが不定形で光沢のある KL 678 より品質がよいとされている事実もこの考えによく一致する。

異名 : 白膠, 食膠, 鹿膠

阿膠* (ろばおよびうま類の皮膚から得たにかわ)

市場品 : 2 形態ある。A : 熱加工してないもの——S 515, KL 647 阿膠, Dj 337 正阿膠,

B : 熱加工して径約 1 cm の球状としたもの——K 396 阿膠珠, Dj 344 炒膠珠

基原 : *Equus caballus* L.* ウマ, *E. asinus* L.* ロバ (Equidae ウマ科)

考察 : 市場品 A の中にさらに品質的にちがうものがある。KL 647 は鹿角膠の KL 677 と全く

同形で、 $2 \times 2 \times 0.5 \text{ cm}^3$ 、一端は黄色帯（幅 0.3 cm ）となっている。これは同形の鹿角膠よりは光沢があるが、S 515, Dj 337 などと比較すれば光沢は少ない。S 515, Dj 337 は約 $10 \times 2 \times 1 \text{ cm}^3$ の墨状のものを割った不定形の塊で、これは黒色で光沢がある。同一薬店で入手したのではないから品質的にどちらがよいかわからない。

異名：驢皮膠、驢皮膠，膠，清膠，盆膠，烏膠，驢膠，煮皮，上清膠，覆盆膠，臚皮膠，顯明肥，杜野皮膠，三千本膠，傳致膠

Ⅳ 動物体，節足動物

この中には13種類，4市場で29品目が含まれる。昆虫類は種類数が多いにも拘わらず，文献が手許にあまりないので，同定は困難である。

全蠍*（さそり類の虫体）

市場品：S 487 製全虫，KL 608 淡全虫

基原：Buthus martenii Korsch* キョクトウサソリ（Scorpionidae→Buthidae キョクトウサソリ科），中国，北朝鮮に分布

考察：和漢薬名彙によれば Isometrus europaeus L. マダラサソリ（宮古，八重山産）も基原となる可能性があるという。

異名：蠍子，全虫，蠍，蠍，杜白，全蝎，伊祚，尾蟲，渴砂，蝟螂，水乞食，正全蝎，主簿蟲，泡全蝎，蠶尾蟲，蝎虎蝦，主簿虫，蚰螂，蠍尾

蜈蚣*（むかで類の虫体）

市場品：S 488 蜈蚣虫，K 367，KL 609 川百足

基原：S 488 と KL 609 は同種で，K 367 とは異なる。

A Scolopendra mutilans Koch ツトビムカデ（Scolopendridae，オオムカデ科），本州以南，朝鮮，中国，台湾——S 488 蜈蚣虫，KL 609 川百足——

B Scolopendra（オオムカデ亜科）または Otostigminae（アオムカデ亜科）のもの——K 367 川百足

考察：K 367 は完全体がないので同定困難，葯材学では S. morsitans L. タイワンオオムカデを基原としているが，これは顎肢が S. mutilans より大きい。しかしながら蜈蚣の基原としては Scolopendrinae 亜科，Otostigminae 亜科のほかにに近縁のものがあると思われる。

異名：天龙，百脚，百足虫，全头蜈蚣，千足虫，百脚，天龙，呉公，蜈虹，蜈蚣，蜈蚣，土蜈蚣，全蜈蚣，蜈蚣蟲，活大升

蟻虫*（ごきぶり類の虫体）

市場品：S 489 金地別，K 368 金土蟻，Dj 340 金地蟻，KL 610 金辺土別

基原：Dj 340 だけは異種，他の3市場品は同種

A *Opisthoplatia orientalis* Burmeis サツマゴキブリ (*Epilampridae* マダラゴキブリ科)

—— S 489 金地別, K 368 金土驚, KL 610 金辺土別——

B *Blattaria* ゴキブリ亜目——Dj 340 金地驚——

考察：薬材学では *Eupolyphaga sinensis* Walker (*Polyphaginae*) をあげているが、これはマルバゴキブリ *Heterogamia aegyptica* L.[†] (= *Pseudoglomeris planinscula* Brunner von Wattenyl?^{††}) に近縁のものと思われる。

結局、ある特定の何種かが基原とされるのではないかと思う。

HK 191 水金驚蟲ホンコン市場品、中国福建産もAを基原とする。

薬材学の蠶虫の付注に *Cybister* spp. を同類生薬としてあげているが、これはゴキブリとは似ても似つかないゲンゴロウ類である。

異名：地驚虫，土別虫，土驚虫，簞箕虫，冀地驚，地驚，盖子母，臭虫母子，土虫坑，土元，土虫，地烏龟，灰鼈虫，土別，土驚，土鼈，別虫，地別，地驚，地鼈，過街，土驚蟲，地必蟲，蚶蛟蟲，簞箕蟲，油頭土驚，潮陽土驚，庶蟲，地脾蟲，簞箕蟲，土鼈虫，金辺土鼈

九香虫* (かめむし類の虫体)

市場品：S 614, KL 611 九香虫

基原：*Coridius chinensis* Dallas* (= *Aspongopus chinensis* Dallas^{††}) ツマキクロカメムシ (*Pentomidae* カメムシ科)，中国東北，朝鮮に分布

考察：薬材学によれば *Coridius*, *Cyclopetta* および *Megymenum* など3属9種が基原とされるが、商品として最も多いのは上記のツマキクロカメムシと *Nezara antennata* Scott アオクサカメムシの2種であるという。しかしカメムシ科の中で、この特有の臭気を表徴として、すべて九香虫と称されると考えられる。

異名：瓜里春，打屁虫，屁巴虫，屁板虫，黒兜虫，酒香虫，黒兇蟲

蟬蛻* (せみ類の幼虫の脱皮殻)

市場品：S 491 蟬退，K 371 金蟬壳，Di 322, KL 613 金蟬退

基原：*Cryptotympana* sp, クマゼミ属 (*Cicadidae* セミ科)

考察：薬材学では *C. pastulata* Fabricius を基原とするが、脱皮殻だけでは種の同定は困難である。

異名：蟬壳，蟬衣，金牛兒，蟬皮，知了皮，熱皮，唧了皮，唧猴皮，土蟬衣，虫退，麻兒鳥皮，唧螻皮，全退，全蟬，枯蟬，腹蟬，蜎甲，蟬殼，程金蟬，蚱蟬，仙久衣，腹蟬

紅娘子* (はぐろぜみ類の虫体)

市場品：KL 614 紅娘子

[†] 松村松年：日本昆虫図鑑（昭10）

^{††} 和漢薬名彙

基原：Huechys sanguinea De Geer* (Cicadidae), 中国南部, 台湾

考察：中薬志によれば紅娘子に2種類があり, 他の1種は H. philaemata Fabricius である。

異名：紅娘, 紅蟬, 樗鷄, 公姑虫, 灰花蛾, 花大鷄, 山鷄腰, 紅蓋虫, 樗雞

殭蚕* (かいこの消化管にムスカリジンが寄生して死んだ虫体)

市場品：S 492 殭蚕, K 372 白羌蟲, Di 323 姜蚕, KL 616 羌蟲

基原：Bombyx mori L. (Bombycidae), 寄生菌は Batrytis bassiana Bals. (Mucedinaceae イモチ菌科)

考察：HK 192, 193 姜虫ホンコン市場品, 韓国産および朝鮮産もこれと同様。

異名：白殭蚕, 殭虫, 天虫, 白殭虫, 白苟, 白殭, 江虫, 死水, 姜密, 姜蟲, 羌蟲, 姜蠶, 羌蠶, 白甘遂, 淡蟲鼓, 直殭蠶, 蟻殭子, 殭蠶, 白蠶, 石蠶, 原蠶, 死冰

羊天雷 (たいわんだいこく類の全虫体) (写真4)

市場品：S 522, KL 656 羊天雷

基原：S 522 には2種あるが, そのうちの1種は KL 656 と同種である。

A Catharsius molossus L. タイワンダイコク (Scarabaeidae コガネムシ科), 台湾, 中国, インド, マレーシア, アフリカに分布

——S 522-a, KL 656

B Catharsius sp. または Copris sp.

(Scarabaeidae)

——S 522-b

考察：Aは黒色で光沢がなく, 小さいもので頭, 胸, 腹部の揃ったものの全長27mm, 幅18mm, 大きいものは40mm×25mmである。

BはAよりひとまわり大きくて, 頭部を欠き, 黒かっ色で光沢がある。胸部背面はこまかい凹

凸の網目紋があり, 上翅に浅い条刻と条内にあらい点刻がある。胸腹部だけで40mm×30mm。頭部を欠くところから推察すれば, 頭部の突起がAと相違していると思われる。

中薬志ではAを蜣螂虫のひとつとしている。すなわち蜣螂虫に2種類の基原があるが, もうひとつは Xylotrupes dichomus L. (Scarabaeidae) で, 獨角仙とも称され, 本邦産のカブトムシではないかと思われる。葯材学ではこれを蜣螂虫といっている。また和漢薬名彙によればAを蜣螂, 推丸, 推車客という。

次に述べる推車はクアラルンプール市場でのみ入手したものであるが, 羊天雷に比較するとき, かなり小型のこがねむし類である。そこで基原, 大きさ, 文献の生薬名および市場品名の関係を表にすると表1のようになる。

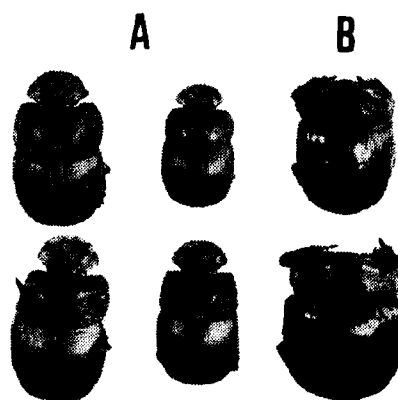


写真 4

表1 こがねむし類生薬の基原と名称との関係

体 長	基 原	薬 材 学	中 薬 志	和 漢 薬 名 集	シンガポール 市場品名	クアラン プー ール 市場品名
約50mm	<i>Xylotrupes dichotomus</i> L. カブトムシ (♂)	蛭 螂 独 角 仙 推 車 虫	蛭 螂 虫 独 角 仙			
20~ 40mm	<i>Catharsius molossus</i> L.		蛭 螂 虫 蛭 螂	蛭 螂 推 車 客 推 丸 など	羊天雷 a	羊 天 雷
40mm以上	<i>Catharsius</i> sp 又は <i>Copsis</i> sp.				羊天雷 b	
15~20mm	?					推 車 a
"	?					推 車 b

異名：蛭螂虫，屎蛭螂，推糞虫，糞球虫，大將軍，獨角牛，官蛭螂，矢甲，弄丸，推丸，姜蟲，羌娘，桔蛭，蛭螂，天仙子，天社蟲，推屎蟲，推車客，俠客螂，黑牛兒，夜遊將軍，鐵甲將軍，淨羌郎虫，馬叱同仇火及，屎克郎，鐵爪將軍

推車（こがねむし類の虫体）（写真5）

市場品：KL 619 推車

基原：1ロット中に4種類が混在するが，大部分を占めるものの基原については不明である。

A *Scarabaeidae* コガネムシ科 約½

B " " "

C " " 2コ

D *Histeridae* エンマムシ科 4コ

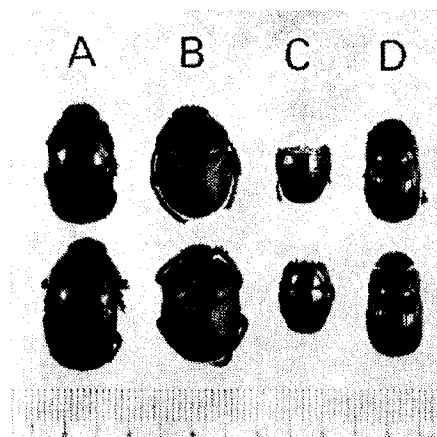


写真 5

考察：A，Bの2種は本邦には全く見られない属のものと思われる。Cは *Copris acutidens* Motschulsky ゴホンダイコクコガネの近縁種である。Dは *Platylisters pini* Lewis マツナガエンマムシに近縁のものである。

Aは体長 15~20 mm，幅約 12 mm，黒かっ色で形は俵状を呈し，光沢がある。上翅には条刻，条内には点刻がある。頭部はほとんど突起がなく，胸部に点刻がある。

Bは大きさはほぼAと同じであるが，やや幅広く扁平で，一見かめむし類に似ており，黒色で光沢がない。Aと同様に頭部にはほとんど突起がなく，胸部に点刻がある。上翅の条刻は極めて浅い。羊天雷の考察でも述べたが，生薬名と基原との関係がかなり乱れている。しかし現

在東南アジア市場では大型（体長約40 mm）のふんこがね類を羊天雷，小型（～20 mm）を推車と称し，基原はかなり多種類あると思われる。

文献にある“蟬蟪”はこの類の幼虫名である。

龍虱（げんごろう類の虫体）

市場品：KL 657 龍虱

基原：Cybister tripunctatus Olivier コガタゲンゴロウ（Dytiscidae, ゲンゴロウ科）本州以南，中国，台湾，朝鮮に分布

考察：薬材学の蟹虫の付注に類似生薬として記載されている。それによれば本種は河北地蟹と称され，华北で消費される。また近縁種の C. japonicus Sharp ゲンゴロウは水蟹虫あるいは金辺地蟹と称され，苏州の蟹虫のひとつである。

異名：龍蝨

斑蝥*（はんみょう類の虫体）

市場品：KL 620 斑茅虫

基原：Mylabris Sidae Fabricius*, Lyttinae ゲンセイ亜科（Meloidaeツチハンミョウ科）中国名は大斑蝥

考察：薬材学では基原としてもう一種 M. cichorii Fabricius 中国名，小斑蝥をあげているが，これは全体に小型である。

本生薬は洋薬のカンタリスとはほぼ同用途であるが，この系統の生薬は斑蝥のほかに数種類あるので次にあげる（和漢薬名彙より）。

- 1) 櫛芫青 Nemognathinae クシゲンセイ亜科，ヨシボシゲンセイなど
- 2) 芫青 Lytta spp. Lyttinae ゲンセイ亜科，アオハンミョウなど（異名一青子，芫青，虻青，青娘子，青斑猫，芫菁）
- 3) 豆斑猫 Epicauta Gorhami Marseul マメハンミョウ，Lyttinae（異名一赤頭，カンタリス，葛上亭長，花螺龜斑蝥）
- 4) 葛上亭長 Epicauta spp. 3) の豆斑猫の近縁種で朝鮮および台湾産と思われる。
- 5) 地膽 Meloe spp. Lyttinae ツチハンミョウ類

なお第八改正日本薬局方には生薬カンタリスの基原として次の3種をあげている。1) マメハンミョウ，2) Mylabris phalerata Pallas, 3) M. cichorii L.

異名：斑猫，斑毛，盤蝥虫，老虎斑毛，斑苗，花斑毛，斑蚝，花壳虫，小豆虫，斑毛虫，放屁虫，斑尾，斑菌，蟹蝥，青蟪，螻髮，龍蚝，日安青，正斑猫，斑猫，花螺龜，土龍青紅，王不留行蟲，龍蚝，斑毛虫

牛虻虫*（あぶ類の虫体）

市場品：KL 621 盲蟲

基原：Tabanus spp. (Tabanidae アブ科)

考察：本生薬は T. mandarinus Schiner シロアブに大変近縁のものと思われるが，胸背に2条の黄白色縦線を有するものが混入していることおよび，完全な虫体がないので同定は困難である。

薬材学では T. trigonus Coquillett ウシアブが基原となっている。

異名：蜚虻，牛虻，牛蚊子，牛蠅，牛蒼蠅，土虻虫，瞎蠓，虻虫，芒虫，蚩虫，蚩蟲，蠃蟲，蜚蟲，大虻虫

五穀虫[†]（いばえまたはにくばえ類の幼虫）

市場品：S 520, Dj 339, KL 658 水仙子

基原：Calliphorinae イエバエ亜科 (Calliphoridae イエバエ科)

考察：3 市場名はすべて同種と思われる。そして Eristalis 属と考えられるが，幼虫の形態だけでは判断がつかない。

HK 202 五穀虫（ホンコン市場品，中国広東産）もこれと同種と思われる。

異名：五谷虫，蛆，水仙，糞蛆，穀蟲，谷蟲，尿蟲，屎蟲，糞蟲，天漿子，糞蟲子，茱甕

<謝辞>

終わりにのぞみ，本研究資料の収集に際し，種々便宜をおはかりいただいた京都大学薬学部名誉教授上尾庄次郎先生，シンガポール大学 Dr. H. Keng，マラヤ大学 W.R. Stanton 教授，クチン森林保護局 P. Chai 技官，日本薬学会，大阪市日盛株式会社鄭岳氏ならびに呉健行氏，また研究資料収集に御協力いただいた京都工芸繊維大学在学中のインドネシア留学生 Gunarso Budiman 氏に深謝いたします。あわせて出国に際し，御便宜をおはかりいただいた京都大学薬学部木島正夫ならびに宇野豊三両教授に感謝いたします。

参 考 文 献

南京药学院药材学教研组編『药材学』（1961）
中国医学院药物研究所等編『中药志』Vol. IV（1960）
木村，木島，丹『和漢薬名集』（昭21）
実用中薬手冊（1971）
劉亜農編『古今薬物別名考』（民国25年）
谷津・内田『動物分類名辞典』（昭47）
日本動物図鑑（1949）
今泉『動物の分類』（1969）
井上・中根・朝比奈ほか『原色昆虫大図鑑』Ⅰ～Ⅲ
（1967～1969）
素木『昆虫の分類』（1962）

素木『衛生昆虫』（1968）
徳永『医用昆虫学』（1943）
三輪『日本甲虫分類学』（1938）
河田ほか『日本幼虫図鑑』（1962）
佐々学編『衛生害虫』（1960）
京都自然研究会編『京都の自然』（1966）
朝比奈『基準昆虫分類表』（1970）
クラウセン，小西他訳『昆虫と人間』
（1971～1972）
『新昆虫』Vol 1～5（1948～1952）
『植物及動物』Vol 1～40（1933～1972）

[†] 中药志